JICA 緒方研究所・外部有識者評価委員会（第 2 回） 概要

１． 日時：2026 年 9 月 3 日（木）10:00～11:50

２． 場所：JICA 本部（麹町）2 階 202 号会議室及びオンライン接続

３． 出席者

【委員】（50 音順）

立教大学大学院社会デザイン研究科	長　有紀枝 教授
慶応義塾大学総合政策学部	神保 謙 教授
政策研究大学院大学	園部 哲史 教授

【JICA 緒方研究所関係者】

研究所長 峯 陽一、副所長 亀井 温子、各領域長　他

４． 議事概要

緒方研究所の毎年度の活動の評価に加え、多様な分野の有識者と今後の研究の方向性について意見交換することを目的として、2025 年度に第三者評価委員会を改組して、外部有識者委員会を設置した。

第 1 部の緒方研究所の 2025 年度の活動報告では研究成果の量と国際的な発信力への高い評価を得た。その上で、援助潮流や戦略的課題に関する分析・提言や発信、アウトカム指標の設定、開発関係の国際的なネットワークにおけるプレゼンスの強化等に関する助言があった。

第２部の今後の研究の方向性にかかる意見交換は自由な議論を目的に、非公開として実施した。

●開会挨拶

ここ 1 年でトランプ政権による USAID の解体や国連への拠出金の削減など国際協力を取り巻く環境が大きく変化。その一方で、欧州・中東の紛争、アフリカにおける感染症リスク、ネパールの水害など、国際協力の必要性はむしろ高まっている。国内では、ODA において国益や安全保障との関係をより明確に示すことが求められており、外国人受入れを巡る議論の動向にも注視する必要がある。以上に加え、AI の急速な普及等により、研究環境も大きく変化していることから、今後の研究の方向性を抜本的に見直す必要性を認識している。

そのような中で、緒方研究所では各研究領域の研究の着実な実施に加え、フラグシップ・レポート『今日の人間の安全保障』第 3 号の刊行や、「人間の安全保障」を測るダッシュボード指標の国際的な普及に向けた取組みを進めている。以上を踏まえ、本日は忌憚のないご意見をいただきたい。

●第 1 部 緒方研究所の 2025 年度の活動報告

冒頭、2025 年度活動報告の概要を研究所より説明し、その後、委員より以下のコメントを得た。

（活動評価）

- 2025 年度に緒方研究所が公開した研究成果の量と国際的な発信力を評価。我が国の開発経験や JICA の現場で得られた知見を英語の査読論文を通じて国際的な学術議論へと結び付けられた。加えて研究者以外の読者層も対象とした様々な発信物を発刊し、さらにフラッグシップ・レポート「人間の安全保障」第 3 号の発刊や関連指標をまとめたダッシュボードの作成などを通じて学術研究にとどまらずシンクタンクとしての活動を行った点を評価する。
- 緒方研究所が発表した学術論文の数は他の研究機関と比較してもよい線を行っている。一方で、査読論文だけでなく、研究途中の成果を迅速に共有できるディスカッション・ペーパーは、内容確認を迅速に行って、さらに積極的に発行した方がよい。またターゲットを見据えて英語以外の言語での発信も期待。

（広報・発信戦略）

- 独立行政法人の 2025 年度計画に「国民に対して提供するサービス等の質の向上」と記載されているが、この「国民」をどう捉えていくかが緒方研究所の広報・発信戦略上、重要と思われる。
- ポリシーノートは英語だけでなく、対象とする地域や国向けの言語で発信することなどを含め、当該地域・国の政策コミュニティに直接届く発信戦略が求められる。
- 個々の研究成果の発信に加え、昨今の国際情勢がもたらした国際協力や援助潮流の変化について全体像を整理し提示しつつ、JICA という援助の専門家集団としての視点で分析した結果を発信してはどうか。

（今後の取り組み等）

- 研究所が日本社会、国際社会に何を提起し、結果何を達成したいのかということに関し、一層踏み込むことにも意義がある。インフラ、保健、教育、農業、平和構築などの JICA 事業分野のみならず、今後の援助アーキテクチャの在り方・再構成に向けて、国際的な潮流や政策等をどう評価しているかも興味があるところ。AI やデジタルなどの科学技術分野と開発の関係などの新領域に積極的にアジェンダを設定していってほしい。
- 事業との連携強化の観点から、緒方研究所が JICA の組織やプロジェクト等への研究成果のフィードバック、事業担当者が研究を行いたい場合の支援を行っていることは、研究活動がさらに広がる可能性にもつながり、よい取り組みであると思う。
- JICA 本体事業の実施中の案件をさらによくするために、現行の評価サイクル等を見直して、新たな方法論を提案してはどうか。世銀においてはアリア

ナ・レゴヴィーニ氏が LEADS（「学習（Learn）」「適応（Adapt）」「規模拡大（Scale）」）を導入して世銀のカルチャーを変革してきたが、こういった経験を参考にするとよい。

（研究所の運営等）

- 成果指標に関しては、現在の発刊件数やイベント数などのアウトプット指標に加え、緒方研究所の研究成果が政策策定や国際的な議論にどのような影響を与えたかという観点でのアウトカム指標を設定してはどうか。
- 世界の援助関係者が形成する多くのネットワークに参加して、緒方研究所がそれらのハブとなることが望ましい。国際会議が増えるが、オンラインという手も使って出席し続け、いつもいて必ず何か言う「顔」になることが肝要だろう。援助潮流の最新動向や関係者の本音ベースの議論等を把握し得る立場に緒方研究所がいることで、国際的なプレゼンスが高まるし、国内的にも、日本の開発協力の方向性を検討する局面において、「緒方研究所が存在していてよかった」と評価されることにつながるだろう。
- 学術論文等の発表件数は学術コミュニティにおける存在感を示す上で多いほうがよいが、研究者を多数雇用するのは逆効果である。自らのネットワークを駆使して優れた論文を量産する十人力の研究者を、１人か２人確保して、ふんだんに研究費を与える方が、論文の量も質も高まり、本格的な研究機関としての信頼を得る近道である。ただし、雇用は期限付きとし、マネジメント等への対応の負荷は無くし、研究に全力で集中してもらう環境を提供することが肝要。緒方研究所においては、多様な研究発表媒体等を意識しつつ、研究の量と質にメリハリを利かせて、今後も研究所を運営して欲しい。

≪緒方研究所からの説明≫

- 研究そのものについては、おおむね高い評価をいただけたとことに感謝申し上げる。
- 緒方研究所は研究を通じて JICA 全体の事業の質を向上させる役割を有しており、間接的ではあるものの研究活動を通じて JICA の国民に対する説明責任を果たして参りたい。
- 委員の皆様からご指摘のあった国際援助の潮流や戦略的課題に関する分析・提言については、緒方研究所内の開発戦略領域や企画課が中心となって対応している。JICA 本部の企画部援助協調室に対してサブスタンスの議論等をインプットしており、外務省関係者にも、定期的に報告を行っている。こうした関係者からも、緒方研究所の活動について肯定的な評価を頂いているものと受け止めている。これまでも例えば「ポスト SDGs」や「ビヨンド GDP」をテーマとした報告書へのコメントも提供したところ。
- 地経学研究所とは ODA の役割の再考をテーマとしたイベントを共催した。学識者や市民社会の皆さんも交え ODA のあり方を考える場を作っている。
- 今回の助言、示唆を踏まえて、今後の活動を行っていきたい。

以　上